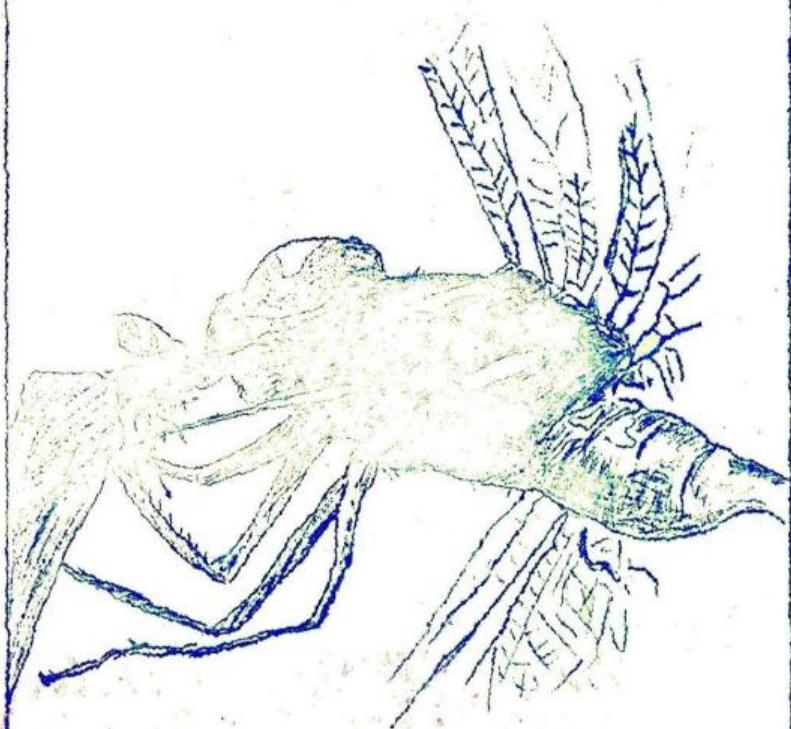


王ノシロチヨウ

No.3

昆蟲採集特集号



麻兒寫真
吉布志高校 生物研究會

志布志高校生物研究會會報

モンシロチョウ

昆虫採集特集号

1951年8月11日

No. 3

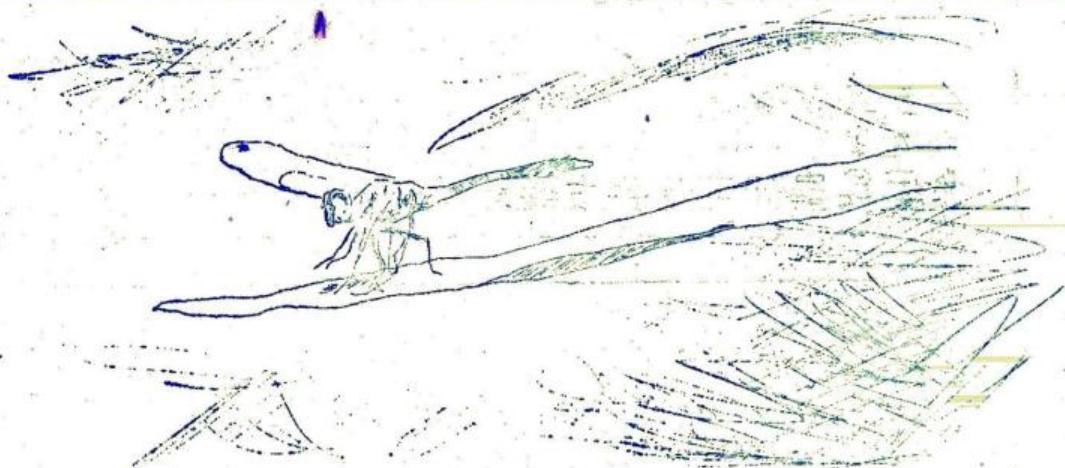
目 次

昆虫採集特集号発刊に際して	新川勲	1
昆虫採集地案内		2
志布志地方の蝶 (3)	福田暉夫	6
キジバトの研究 (ホー報)	久木清富	8
今年の蝶の初見日		9
リシャール式採卵		10
高千穂峯に蝶を追つて	福岡伸及 新川	13
甲蟲 (3)	新川勲	17
展翅板		18
○ 今年の蝶の新記録加附		
○ 西日本地方のシルビアミジミ	福田	
○ ミヅイロオオガシシミ多島地	福田	
○ トニボ難記	新川	
ムシスケッチ		19
会だより		20
全国昆蟲研究者蟲友雑記		20
後記	新川勲	20

昆蟲採集特集号發刊に際して

3年 新川勉

夏休みが近づき、野外はまさに昆蟲の天国である。我々のクラブも壁を中心とした自然の真摯な探求に取り組んで、主に昆蟲の生態分布を明白にしようとしている。日本海の南端に位置し、我が昆蟲に対する意識も高まりつつある。やさしく大福昆蟲同好会を結成するにいたつたが、当地方の人々の昆蟲に対する興味はまだ多く、唯一人の加入者も外からでは手つかず、まづ高校生が中心によるつて、興味を引き立たせねばならない。現在の我々の生物研究会は発足して3年を経て、初めは誠に知識の乏しい平凡なものであつた。昆蟲においては特に、良い本少なく、指導者もなく、全く、形田白の「蘭学事始め」と同様に苦難の道を歩いていた。現在ではどうやら一人前になつた。蝶の分析も生態も次第に明白になつたが、まだ前途多難である。今まで何とんど手のつけられていなかつた昆蟲だけあつて、研究の興味もつきつい。現在の蝶は六十数種を数え、まだまだふるえださう。今までには珍重するものがあつたが、今後大陸全体に目を転じなければいけない。この前の露島採集行は、よい試みがあつた。今度の夏休みには佐多岬に行く予定があり、大いにとの成果が期待される。甲虫においては2000種以上と考えられる。当地では、まだほんの一郭のみしか調べられていない。会員全体が熱心に研究すれば、どれほど昆蟲界に役立つことだらう。最も研究されやすい蝶ではあるが、それでもまだ知らないことが實に多い。しかも当地でガーベラ等多くており、我々に興味ある山の便りは大ざつがある。そして、トニボ、甲虫、ハチ、アブなどの他の昆蟲に於てもやさう。我々の研究は、採集より飼育がんさつに移りつつある。日本最南端にある佐多島の大半を利用し、南洋独特の研究もさきに、我々は互に自覺して会を發展させたいのである。



大閩地方

上也安其樂矣

立 夏 井

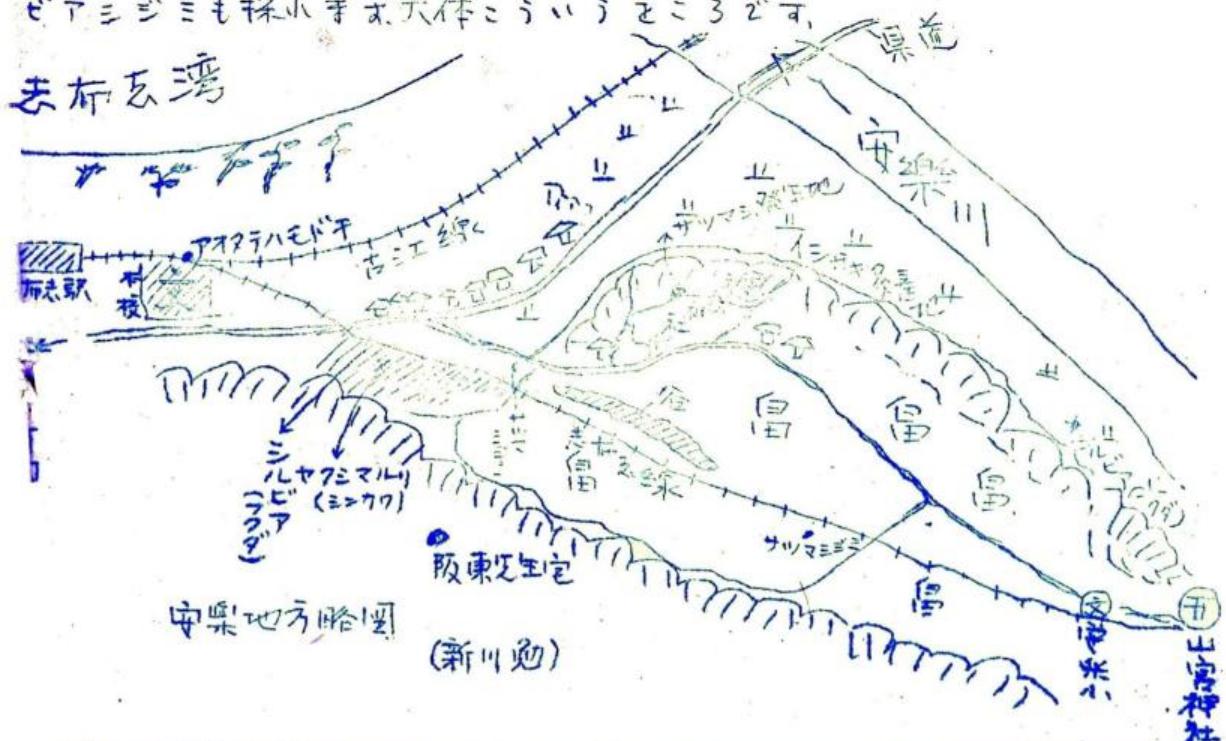
走龙志町

今年まではあまり三個と山でハナゲツ天下のであるが今年の冬
からしばしば寒風が吹き、その影響で紅葉が遅くなることが
つづけて天地方舟道岸から道路一本をへて西に進むものが多
い。今までは森林の斜面も紅葉が早く、後でもののが多く、大登場をするに
うえおはり、植物も割合に遅く、紅葉に近い様なものが早く、大登場をするに
らかしきことを大体まとめてみると、(1)寒の発生が早く、大登場をすらむ。(2)紅葉
がやや遅くなる。(3)今までは入り口、又、サツマシジミの
御園の山、ジブコウアデハの大登場があった。この紅エタイの知れない
産地であるヒスボニキヨウも出撃された。先駆は遅めで少く、遅いもの
の(?)を除いては、しばしばある。先駆は遅めで少く、遅いもの
の遅いものが多く、山があり木などおおむねれて
越冬した。山の多くは相当多いが、是れは山の少ないものである。
と比べて林間に多くはしらしもある。夏は密が多く、特に
人家は山の附近に多くはすこたり骨立たれ、それには迷蝶のそれが可能性がいい。
ドモヤクシマルリ、タヒワニルリ等も

2 安樂 (あんらく)

志布志門

まびがすごい急ぎで飛んでさます。人寰にミカンが多いからでしょう。小学校に行く途中、畠の中に一スダの谷があり、そこにも、イシガキ、サツマが多し。イシガキの幼虫もたやすく採山ます。又、当地にあまり多くない、シリダ、テハも、見られます。元気一ぱいに移動するうちに、いどむと、全く庄倒です。小学校附近はモニミロキヨウボ一巻早く出ます。絶路の側に穴の指ニコガあり、中にリマグロヒヨウモニモニコニラグよしは入つてります。今年の春は白いにわとりの毛をイシガキとまちがつ。2,3人で10ロム位かけで、キデキもありせず、どうしてこじかが、あまりゴイミニシミはいるふうです。今度は守楽川の田んぼめうあふりで、いまチしょう、途中的の庄倒社あたりは、ミカドアゲハを英先に、モニモナガザキ、クリカラスと多り、ミカニに水ときこひるぐらアゲハが多いのも当然でしまよう。道沿のイラクサにはアカタテハ、幼虫の死ガイも多く見られ、留てば手のしめで立ちる。ナガサキアゲハはここにみさるといいたい倭をくじります。川にあります。イシガキキヨウの多産地があり、また卵幼虫らくに得られます。イヌビリには大ヒフリエリマス。ミカドアゲハ、森に所て船底のは、きれいです。が、今年5月にはいたるところにいました。普通は高所をと避暑で降りてきます。年に一度、アゲハとモチビは草花や、庭園にもさまで、キアゲハは余り多くなく、ニのホモビは一匹を貰つて大ふんとうするよりも、トリつた同じです。スミナガミモホモビは、とび、余り多くありません。サツマミニシミは、本型は5月19日が好日です。アゲハ、イシガキは成虫越冬をうち3種類です。不完全で半化で、名は一歳ですが、イマゼワの小さい身に庄倒あるのを見るのは春だけです。福井君も最初で春採りました。リニヤールで成功者は多いようですが、尚三ビアミジミも採れます。大体こういうところです。



本会予算 17000円
昨年度は 11000円

西赤志地方の蝶

(3)

3年 福田 晴夫

[シロチョウ科]

モンロチヨウ

春早くあらわれ各地に最も普通で十字花植物の害虫として有名である。夏型は5月にあらわれる。

スデグロシロチヨウ

前種同属であるが春期の発生がやゝおくれるのは面白い。

キチヨウ

冬でも暖い土手などに見られる普通種で季節的差異が甚だしい豆科を食す。

ツマグロキチヨウ

前種に同じ。

モンキチヨウ

前種ほど多くはないが5月～6月ごろには最も多い冬でも時々見られる越冬性はよくわからないがおそらくサナギであろうと思われる早に毛虫の二型を産する。

ツマキチヨウ

3月中旬より4月中旬にかけて最も多く発生するが毎一回の発生だから時期をばさぬ林に採らねばならない。

[シロミチヨウ科]

ヤマトシジミ

3月中旬より疏波まで数回の発生をくりかえす普通種で食草はカタバミである。

シルビアシジミ

本種は展翅板にも書いた如きに今年始めて1月半を採つた海ビの程度のものか不明である。おそらく3月末に安樂川堤のあたりノミヤコグサを自當にして行けば第一回目の発生はとれるだろう。ヤマトシジミと混同しやすいから必ず採つてみることが大切である今後研究の余地がある。

ツバメシジミ

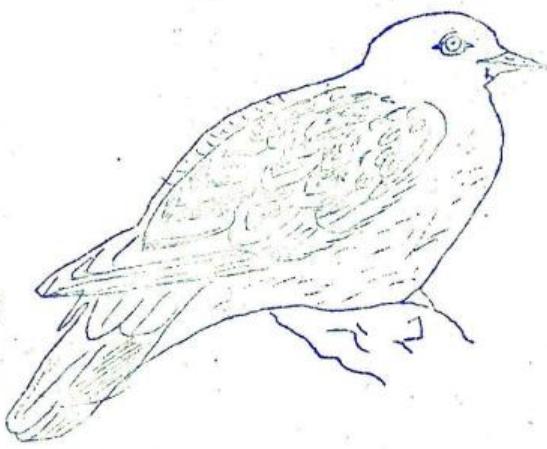
2月末より出て数回発生し秋まで見られる各地に普通で豆科を食す。亜体差異が多い。

- ルリシジミ
前種同様早春よりあらわれる。普通種3月末には夏井に大發生をする。之が代は5月に出る食草はフジクララなどである。
- サツマシジミ
本種は本州に産するスギタニルリシジミと共に食草は全く不明で現在その生活史の研究が最も頗る進んでいないのである。分布は北九州あたりではほとんどなく南九州より南方へかけて多い種である。こゝ迄でも3月中旬より4月下旬にかけて多数の發生がせらるる。夏の發生に関しては知らぬが秋には新川君が寧葉と夏井で2合を採つてある。飛翔は割合に高い所をとび、ルリシジミノ様に上下を左石に飛ばずほとんど一直線で逆が白く光るから遠くのう見てとてもくわゆる蓬原での観察によると大体一定の高さの同じコースの飛行である。植物との関係は花や咲くもの以外は竹、杉、柏、檜など樹に樹不性のもので食草も樹木であらうと思われれば食草は殆どの發生があらかわからぬが春の發生の樹に多ければ食草より見えて向進いことと思はれる。食草を見た手段としては追跡に困難と思はれる。追跡の方は木に迷わずなく高く木の上などを飛ぶのである。しかし失うことがあり、後半は食草が全く想像できない為である。しかしすれにしう本地方でなくしては国内の研究は出来ないから今後のこさらば最大の問題である。
- ムラサキシジミ
大体前種同様で成虫で越冬しほとんど一年中見られる。各地の雑木林に多い種などを食とする。
- ムラサキツバメ
本種の發生は6月より8月までと、10月の2回と思われる年に出現したものがそのまゝ冬を越して3月次に最も多く飛んでくる。しかし少く破損してある。夏の發生は主に雑木林で秋はソバの花に若者よりよく多く集まる。食樹は柏である。
- ウラギンシジミ
夏型と秋型を産すが若者は(6~7月)あまり多くなく秋型は(9~10月)で個体数もかなり多い。雑木の高い所を活潑に飛びまわる。
- ベニシジミ
3月下旬より5月まで春型が各地に現れ普通夏型は2年8月に荒武君が夏井で一頭を得たのみである。食草はスカランボヒノコビ。尚霧島には夏型が多かつた。
- ウラナミシジミ
春型が3月中旬にすこし出る。本格的發生は8月には入つてからで各地の高い所に多く食草はフデなど
- ゴイシシジミ
幼虫が竹のアブラムシを食す純肉食性といふ有名である。多発地が岩川で春型と秋型も多い。さうであるが蓬原でも一頭は得た。竹や木の附近が好採集地である。

以下次回

キジバトの研究 (第一報)

2年
久木清重英



此の鳥は、ニカラガはサトバト(鳴鶴)と呼ばれてあり、ほんと金剛に今
ニシヘイミ、カミマラズ、遠くは支那
名古アタリキギミ、南九州におい
シは若手は森山にのこるが他は、寒

地をへる延々行く。そこを当地方では秋に渡つてき。翌年の春まで
居、モコミ、この時飛行は農作物を食すので11月15日より2月末日まで
モコミことにはまつて11月、この島は此種の鑑別は非常に困難で
モコミをもけらぬまいほどである。鳴き方はリーグークークー、クークー
クークーと鳴く。音速は2~6羽後ずつ飛ぶが遅つて11月すが多くの食物を見
つけると、後回りを10~50羽の大群をもして11月。晝の活動は、午前7時
ごろ3泊り木を飛びたる。山間の煙に行き、3時間後の朝、森林に行き、
木をあさつたり体へどりじて恩うむ合食べたら10時~11時の谷間に
水をのみにやつくる。次にはこの当らるる杉が松の枝エノキヌ
に走り、そこを外敵に襲はれるのがきり、1時以後休息する。遅くよつ
くには、向火にかかてる。3時ごろ水をのみ、5時よつと行人がヨリ餌
を出しに行く。そのそを長く休息してそのまま泊りに行く。11月、夕
方の4時頃山を小各川のほとりに泊りに来3、その泊り方は一旦、
木の枝にベタバタと鉛錠に止り、何事危險な事はより力も警戒し
てから、3月ごく近くあたらる11月の位のところにとまる。これが木
の枝や、どの茂り工合によつて裏る。竹や3月には、アテの木などには、
木体守り合つてゐる。度は猛烈に矢と万よりちよりねばとう方に行き
て、それがニ山の鷹の巣場所についたら、少々音がしても逃げません。
ここで発スズドニとヤフテ一羽みぢみと他の鳴は一度に逃げます。オイロ
・2度をつと又同じ場所にかえつて来る。またうつ、又逃げると、うつ資金
を十羽位は金額を多ニとかけます。これで鳴は一度、自分の場所をきめ
たら、外敵にもめまわす同じところに帰る習性があり可。

食やものにつけては合儀が立つて、11月キジバトは冬にモコミの
につけて研究しました。その結果、モコミのは穀物などを内ソバと
モコミ代表的でもあるひす、ダイヅは、少しは石がます。おもほどはあり
ませんアリキ、エンドウは全く食べさせぬ。4ギリ、ほんのやづが立ります。
同じ茶でもモミジ食べさせるとよく食べ3が玄朱はあまり立たない。
多く、モミジを立たなくなりますがまだ網が立ち面白いと思ふ。青物は、ハコ
ベの様な、山からかいものを食べ、ニクトリの餌のリュウザツナも食べ
る。今3につけてはまだ多くからなりが多分立たない。3月に見う。野
外では主に木の枝であります。骨をよくと中には11月の様子があつたが、
この研究が実りしく立つとすれば、界隈の中が大体現化をし

といった鳥、名前があがらず残念であった。しかしもう少しだけかぎりたものは、伏サギ、エノキ、松の木などはわかった、木が実でも、ハサミで切れるものは、大体消化されてしまう。半位のものなら、200～300位は食べる。

以上、甚だ、不完全ではあるが、一回目と17号で得たことをあげておいた。今後も、もっとくわしい注記を、今までの種類、量などに目を付けておきたい。まだ不明の点が多いのは、残念であるが、恐れしましておま。

1951年の

虫の初見日

アゲハチョウ科

ナミアゲハ	3. 4. (下尾)	志布志町小浜
オナガアゲハ	4. 9. (伏の)	志布志町宇采
アラスヂアゲハ	4. 3. (断川)	～～～夏井
ヤアゲハ	3. 10. (福田)	～～ 守米
クロアゲハ	4. 5. (断川)	～～ 夏井
カラスアゲハ	4. 11. (船田)	～～ 守米
モニキアゲハ	4. 3. (断川)	～～ 夏井
ミカドアゲハ	5. 飛 (上西)	～～ 守米
アゲハチャアゲハ	(4. 9) (福田)	～～～
ダイコウアゲハ	(3. 30. (船田)	～～ 夏井

タテハチョウ科

ルリタテハ	3. 3. (断川)	～～ 守米
ヒオドリチョウ	3. 24. (牛尾)	～～ 御庄所跡
ミマダラチョウ	4. 29. (断川)	～～ 守米
イシガキチョウ	3. 11. (牛尾)	志布志町夏井
	3. 11. (船田)	志布志町羽根原(印)
コミヌテ	3. 30. (船田)	志布志町夏井
イチモンジチョウ	4. 29. (御庄所)	～～～ 守米
ツマグロヒヨウモン	2. 27. (断川、福田)	～～～～～

ヒカゲチョウ科

コロバタ	5. 3.	守米 (断川)
クロヒカゲ	3. 29	蓮原 (船田)
ヒナウラナミズ	4. 9.	各地
ヨコヒヨウ	1. 1.	蓮原 (断川)
キマダラヒヨウ	3. 30	夏井 (船田)
(アカギマダラ)	5. 3.	守米 (牛尾)

セセリチョウ科

アラセセリ	4. 15.	夏井
ミヤマセセリ	3. 24.	御庄所跡

ラジミチョウ科

ベニミジミ	3. 20.	守米
トリミジミ	3. 10.	夏井
ムラサキシ	1. 1.	各地
メマトミジミ	2. 23	守米
サツマミジミ	3. 10.	守米
ツバアシジミ	2. 16.	守米
ウラナミシ	3. 11	～
ムラサキツバ	3. 1	～

ミヅヒロオナガ

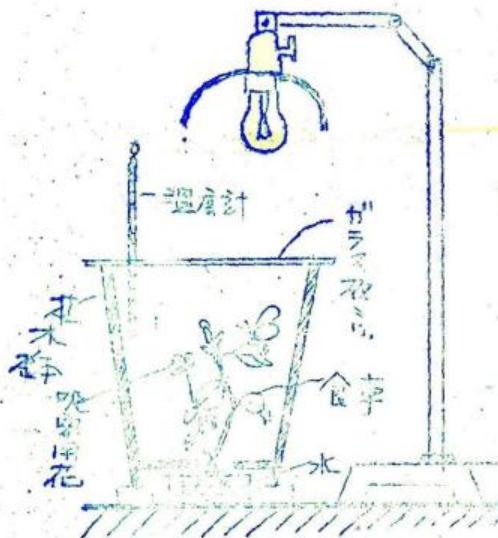
6. 3. 蓬原

シロチョウ科

モニシロ	2. 22	守米
スデグロ	3. 4.	岩山
ツコグロキ	2. 22	守米
キヨウ	～	～
ツマキヨウ	3. 16	～
モニキヨウ	3. 15	～



僕らの成功失敗 リモート式蝶の採卵



リシマール式採卵法

野外で捕る天牛を金網に入れて、それを用の花を入れて、早速近く山日出川の川端紙箱に入れる。第一回は、3つくりたものに小さな花の三つをいが、黒い紙箱のうすい夜が秋の十分に喫る温度にしきこむ。翌日より1、2時間毎に数回、最初は一卵だけに、一つの種不思議に、一卵だけに、燈の強度や位置には温度や湿度も関係するから冬場やその他の季節では、3-4度まで下せられたり、温度は鉢底に下るから必ず、一日中25度位がいいとのことである。常に体温を保つことが大切だ。
2) 理屈からくるカビ、3) 球の不
ルギーのリニアール化によるも
く、13-13. 工業化されることの
実跡さんのもとから(3)でした)。(3-4)

1 ツエグロヒヨウモン

(宋元鼎書)

第一回の直径は 6 cm の鉢を採用した電燈は学校であつたので便座ある。それがさすがに手の手で(もちろん食事用は要らず)にしても、下の3回は約20cmの鉢を採用して、場所は研究室の窓から夕日が西に沈む間に思ひ出を歌う歌で、日光が電燈の光にまつたと思ふ。また、天井の灯りは弱かつた。

物の運送は直達で支那に定期を保持した初めの一回を暗黙にしきりに
運送する事で、年数を経て荷物を積み、その荷物が積み替わる事で、
運送する事により、必然に上昇した。これがつまり運送の格段だし、
運送の結果と運送料とすつたと同時に、運送を相げて、貿易へと明るい
運送に一層重視される。運送は、即ち運送のためらしく、即ち運送だとき、
運送は、もう手を取れ、身を引きさせ人に運んでおこなうことを即ち運送
といふのである」という、古河、つゝ。

た生みだした温度が 24°C に至る。わざれまわるの外に出して体を
いたたかず貯蔵した。こうして3時間にしらべたところ、372個生んでいた。
翌日、下移後148コヒラリ、翌日には122コヒラリも生みをうも。
なかつたのを逃がしてやつた。唐人たる所にはスミレの表面裏面他の草、
ハナにまぎれてつけた。この割合を強見したら面白いと思ふ。要するに
ヒヨウモニ類打開壁です。

2 キタチハ

(仲尾景吉)

本種は2回して2回とも成功した。第一回は電燈と食草はイラクサを
用いた。この時は温度計がなかったため温度については尋ねても言ひません
が貯蔵してから5分間が過ぎはじめた。一回生んでとき、グラスを手
にしたままふりぬいたとき、逃がしてしまつた。次回は5月28日採
集した早とすく井に入れ寝込めて3日にエリエ登移時に最初43分位は
30日は逃げて日陰に隠れていたところ、葉のり面に付くはくがいた。こ
の時の草草はガラスアラフを役用して電燈を全部使つてやつた。

3 ミカドアザハ

(伊地保知房)

5月初め安樂の鶴木林中オガツマノキの周りを飛翔中のミカドア
ザハとつたところ幸運にも手であつたのでリサイアルにす。電燈はモード
243、前回にタテハナヨウの操作部の蓋を開放しながらも今度は腐さ、5
cm、横60cm、奥行き30cmの前部をアドリの本部で車輪のガラスを
はずして箱室にこもる。あきらめへ不がタマまでした。そこでたゞ
一日目の夜電燈を点灯して観察したが、箱室を広げておいて十分に
絆にすわした。翌朝の3度を点灯の間に、ついで下から氣が入らぬか
て次日の日、3度をさばかしていよいよ観察室のアモルヒスを走入れ
てやつたら、おれはしく窓ガラスを覗き、空腹を満喫するが、おはらく
見ていい下とこも、耳につかずり化けすから様に驚かし、おいで顔を
前がしすがら飛んで天に向って生んでは食草からはるがおげ石に天に
ておと同様に飛んで、6コほくが空を吸つて、7コほく天に静止し
てしまつた。この群の成虫は他の大アゲハに見られる産卵管と同じく、
飛びながら箱室を飛ぶも産卵するので通り大きさはいよいのではる
かと違う、光は一粒からだけ横からよく食草は、ガラス一ぱい抜け出
うがよいと思う。

3. イシガキタヨウ

(新川貞)

食草イヌビワを冬早と使用金木屋經20cmの春鳥さと太陽花の
弱くまつたときであつたので電燈を使用してやがつた。この時期では、太陽
光線の使用もよい方法のようですが、私は春鳥さと太陽花をからめた二つが
わりますが、これは量で2、2個しか生めませんでした。翌日もそ
うどうかと見つけますアカギマダラなどは運転がやさしく死にます。

4 ゴミダラモモ

大部破壊してやつた (新川貞)

大部破壊してやつたところ、翌日は2個産卵した。例の基盤がア
キモーにはじめに飛びた瞬間にからは歩しも産卵しました。この時
候が日本ハムの二つが飛んで20コヒラリ。

5 イシガキ子爵

(福田暗夫)

3月30日夏井で1号を採り、三角紙に入れて3時ごろ学校に持ち帰
吸蜜、再び三角紙に包んでそのまま夜を明かし、翌日10時ごろ例の装置
を移す。外はだして2つたが、雲が多く、30℃位にちったとき、おとヒ塵を掛けたが
過度、4月2日、午後5時電燈(100W)しかし、25℃以上には上らない。
4月3日、朝1時間電燈(半失敗)次にえん側にせず、日光は直射である。
1時ごろおといたセミ、ココほど産卵つけられていた。とからずと見ていた。
2回ほど吸蜜した。産卵は、はじめ、尾を曲げてイヌゼウに登り安定したと
ころを見かけると尾端を葉にあわせに曲げ(12~30秒)で静かに産卵
かけらる。壁外に比してやや長い、1時前後からずのうちに9個産んだが、1
回は産してしまった。チズー巣(?)成功。ヒココロガ。この一匹は、夕方逃
げてしまつたので、先日、自宅で採り一週間位不^ル籠に入れていたが
使用することにした。(もちろん吸蜜はさせてある)最初は大変しきにくくて30
分もかかるが、意外にも産んで、(50コ位)卵のもと合せて、80コ位になつた。
まだアブリケタがつたのが、サツマニシミと交換した。ニホンアゲハ、日光でや
つたもので、電燈では、三面盾が上りきらう、ヨコラギユーフンして駄目だつた。日
光で行はる温度が30℃以上になるときこく、ガラスにカゲミを作つて封鎖した。鉢の往
き20cm高さ20cm窓口、ドウ糞(えんぶん糞)をワタに替えたのをサカヅ
モに入れた。

6 サツマシジミ

。もちろん失敗したことは当然ですが簡単にしろとす。食草の代用はマナガキとしてやりましたが
約3日固定できませんでしたがダメでした。複数から、くらんでいましたので切削しましたところ多數死んでしまつて
いた。未成熟でしたのでもちろん孵化せず、形はルリニシミと似ら重なるがつてようです。(新川勤)
4月4日夏井で採ったものを使用する置き換がキと同じで失敗は既にあと全く見当もつてないがつた
(當時)食草モドモ、アキノリ、バラン、ニヒモなど有名な名の植物を少しづつ入れて、吸蜜はぐんにす30秒ただ重
そう腹部をかえくじつとしている。壁下におくと飛ばまわるが、逆に、日光にあつたところ水滴が多數たまつて
ガラスをうらぬこうとしてヒコロヒゲら小出しをつた。すぐネットを手にして追つてザリザリとくしゃくしゃとつ
れてしきつた。すがり落したんじつてヒコロヒの邊にいるときに受け子つた本種が1号を採ることできさず半
年をかかることになつたとこ。これも他のものと全く同じで、手でもや出でてしまつた。これが私の得た体験は、
・常に準備せよ!ということである。いくらじつと止つてはいると思つてもすぐ逃げるから注意すべし、やれり。
壁外で観察して、見当をつけながらアコギであります。以上を之にて。
(福田暗夫)

7 ミカドアゲハ

(新川勤)

私が飼育箱をやつて3個ほど得ました。こんなさわがしいところは恵みであります。箱からとこにかぎり黒い
、まだ足がつかない程度で野木をちろりがよく多くれます。

これらのことを甲野氏直伝のものが伝わつたけれど、政蔵がはどうやら、成功率も高くチャーハンで、ナガ
ニモニモ、カラスをどれも大量に成功している。併せていつも自分を工夫することが一番大切です。

高田穗塚山 山林を追つて

福田晴夫・中尾景吉・新川勉

1951年6月25日、昨年より計画していたキリミマ山キャンプ集会より実行に移すことに至った。予定は24日出発であったが都合により1日延べて1泊とまつたわけである。参加者は本郷より大槻、新川、中尾、伊藤、柳原のもの名に先導から各支小の先生とあ35名以上り名である。いづれも元気一ぱい健脚者30人といったところ、以下その結果記述する。

展望台目次

福田晴夫

暑さがわれた天候もからりと晴れて少々40度あつといぐらである。25日午後3時間の升帳を終えて、山食とどこにすぐ五郎太郎へ向うそこを酒々さんを待ち食せてもものしい成りで12時5分今発の聯車で高原へ。車内では何回かのヨウ語会?の活潑な生もある。ヤリミマドリはスマツミドリに対する言葉やサツマミミコの食事など話題へのけり語りつき多し。途中は田代村の美畠中が原駅にてヨラモニグトく見らるる、御城とホット泉にめぐらえまとめぐらす飛行機が次々にはつきりと飛び立てくる、列車の進行と共に山から次第に右へ移る。午時40分ごろ高原駅についた。30分位休憩してパンそばを買ひ後尾駅に向う。町は大して大きくなく、木々と山の間に水が少しでふる大川?が二つあった。町の出でづれでは、ヤニミヨミヤマトミミなどが多いのみである。約一里後の立派な木造の宿泊所はあつたが40足らずで狭狭だ。ここはオフタケイケイ、この木は日本高麗がいくつもあり、門口より平社の木こよ木たか並木がつづきを供へる。宿泊料は400~600円ぐらゐとことから料金がある。まほもどづくテーの鳥巣につりたこまほ木だを貰えあつた。中でも大槻、新川君、朱モルンゴーも、特参しないといった幸い?成りである。特に新川君は今朝から大いにはりきつて「糸は食ひんぞ生きひらむ」。パンだけですか?「毛根なんぞいらんよ。ツツ岩にはまれていろからおきていいぞ!」何?水筒/せんまものやどうやで?こゆき道筋と御宿室からアルコールの空ビンをかきまくる人のカバンにパンと一緒にしまつてある。旅費宿泊金のためペスルアのソクダニだけはよくたくさん買った様子を。これが日にちづづくや最後のたのしむ?といったところ。一番重いのは寝袋でウクサックに水袋、調理用ネットとさういふから全くやり切れない。おかげに新しいクツはマナガびきて、貝殻があつた。一番軽がらついていくと鳥巣み当り、白リシリミがふらふらと右手に飛ばした。ルリの早だうと窓へ飛ぶたところ、ツツヤマミジチの鳥だった。羽化したばかりらしく羽がよわかつた。怪しいと思つてさじをこの木の枝を見たが別に手にはつかみたら手つかつた。これがツツヤマミジチの第一号であつた。以後はあちこちでみられるのが金葉透色の便りのため一車を下出した。これにつまり、ツツヤマミジチに少しつつ見つけた人の手でやかんけ手をだすことはもうないというさまりび天子。見つけた人は、僕らがの手渡せられ人にねらはせよとしたにした。金葉承認したので運動力を發揮した。鳥巣をくぐると左の方にもかくさざく大きな形の巣木があり天井に五角形だとうである。直径2mもあるがと思われるものがばかりである。さめうつさうた3.こぶんで逆立つて頭くとく胸から降りまつてまツマシジミダヒバ

キャンプ、ファルマー 到、頂上 3200m、
中尾景吾、

お台子が並ぶ3kmというミニシルバを見て私と野村君は感心してしまった。以後、このたびが初めてとなる時に思はずつた私達以外はまだすっかり下りる。2人は一歩スミナガニを食したり、イチゴを食べたりしながら8時頃展望台にたどりついて、しばらく見渡しを続ける。下へ向かってオーラと呼べば、お出迎えでこちらの手前の方へと向かってオーラと呼べば、

新川處
途

搜集上等の標本 山を大体、上中下とわけてした

上(正上附近) 中(脛骨台附近) 下(髌骨滑車附近)

(アゲハ・キヨウテ)	アラスギアゲハ	下	キヨウテ	下	(アゲハ・キヨウテ)
+ガサキアゲハ	下	(一ロ4ヨウテ)	ワニグロキヨウテ	下	クラギニヒヨウモン
カラスアゲハ	下	モニシコキヨウ	モニシコキヨウ	中下	オオベラギンビ
シマウアゲハ	下	スダグロウ	アヤマダラ	上半	ウラギンセイビ

甲虫
(3)

3年

新川勉

カミキリムシ等

クロカミキリ。

トゲリミロオゼビビヨミキリ。

アカホシカミキリ。

ナガコマフカミキリ。

クワカミキリ。

ゴマダラカミキリ。

ノコギリカミキリ。

ベニカミキリ。

ニロスイカミキリ。

ペハズカミキリ。

ホリヤシトライミキリ。

ニデムシ等

クロニデムシ。

ケシキスイ等

ヨリボシケンキスイ

ラサムシ等

オオヨリボシヨミムシ

オオアトボシヨミムシ

セアカゴミムシ

ゾラムシ等

オオゾラムシ。

マイマイカブリ等

ヒママイマイカブリ。

ハニメラ等

ハニメウ

ニワヘニツウ

コニツハニメラ

今までの形式を変えずして、非常に種類の多い甲虫類の目録を少しづつ作成していきたいと思います。同様も大部 分は黒澤良彦氏にあわがいしました。

タマムシ科

タマムシ
カバタエムシ
サツムラバタムシ
クロタマムシ
コガネムシ等
オゾトムシ
センキマオネ
ミドリハナムゲリ
アラコナブン
クロカナヅニ
オオコフキコガネ
コフキコガネ
カナヅン
ハナムゲリ。
スダコガネ

コナツキムシ等

ウベタマモムキ

テントウムシ等

オオテントウ

テントウムシ

ナホニテントウムシ

以下は実三等級の同定に及ぶ

メナギハムシ (ハム三科)

コモンシジミガムシ (ガム三科)

ヒカルオイトシジミ (ゾウムニ科)

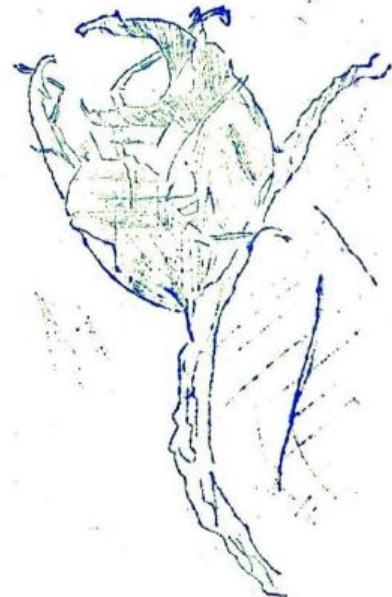
オオツカムシ (ツカムニ科)

マルエニマコガネ (コガネムシ科)

レミザニゴロウ (レミゴロウ科)

ダイコニカルハムシ (ハム三科)
ヒメアカボミテニトウ (テニトウムニ科)
クロイロクヤムシ (ヤムシ科)
メマトツツクリコガニ (ゴミムニダマシ科)
ヨツコアゴミムシ | | | |
フチケマグリコガネ (コガネ科)
ベニハナボシテニトウ (テニトウムニ科)
ニシゴミハシグマミ (ゴミムニダマシ科)
マツヒラホミジムシ (ハムムニ科)
ハムミガムシ (ハムシタマシ科)
ナガゴミムシの一種 (オアムニ科)
ウスケコモリムシ (オアムニ科)

以上順不同
上記でも完全にしたかったら



新川水系の鳥類

● 今年の虫集の季節追加種

オナガアゲハ	大野	6月2日	赤城山(各地に発見する)
ウラギンスズヒヨウモン	福田	5月28日	白神山地(各地に多い)
オオウラギンスズヒヨウモン	新川	6月24日	霧島山
キニグチヨウ	野村大野	6月24日	霧島山
ミルビアニヨミ	福田	3月22日	安来
トラフミジミ	新川/伊地和	6月24日	霧島
ミドリミジミ	大野	6月24日	霧島
ホソバセセリ	備向	7月17日	蓮原
ヒナキマダラセセリ	大野	6月24日	霧島
ヒオドシキヨウ	野村	6月24日	霧島

● 赤城山地のシルビアシジミ

MS 1.7 6月22日 午後3時ごろ、山鹿神社下の田んぼにおいて1羽をとり、その後再び1羽をとった。これは鹿児島県における最初の記録とのことです。その後 8月6日、蓬原において、1羽を捕った。これまで本種は各地に産するものと思われたが、当種不以、皆君ノ所生している。(福田)

● ミヅイロオナガシジミ多産地

本誌N.2に少しのべておいて多産であることを記載したので重複します。6月3日 云と同じ場所、蓬原、クヌギ林にありて、多數目撲し、6頭をとらえた。白水先生にみ知らせしたところ、本種は、南九州では全く記録がなく、南端にこんなに多産であることは、非常に面白いことである、とのことである。各地に張りどうに図わぬ。

(福田)

● トニボ新記

ここに今年より、トニボに手をつける朝比奈正二郎先生に用意をおねがいして、普通種であるが、またペニコニ

(カワトニボ^未) ハグロトンボ(?) 1951.V.14. 想らく日本初の出現率の最も早いもの 安来
アヲハダトニボ 安来 ニ山口半島最南端の記録でしょう。

(カナトニボ^未)

キイロサナニ(早) 安来 2.V.51 上唇が眞實のみと正面に位す。本邦最南端記録。

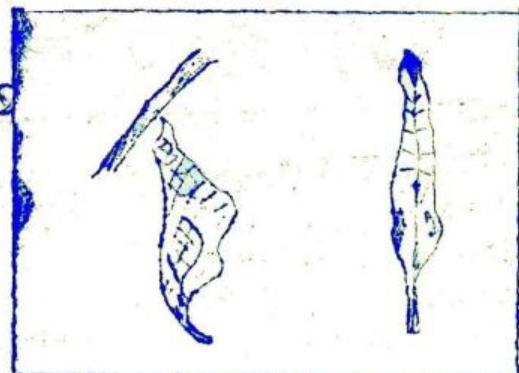
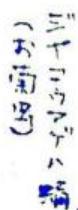
ママカナエ(?) 安来 14.V.51. 最南端記録。

オグマサナエ(?) 安来 1.V.51. ククハクハ

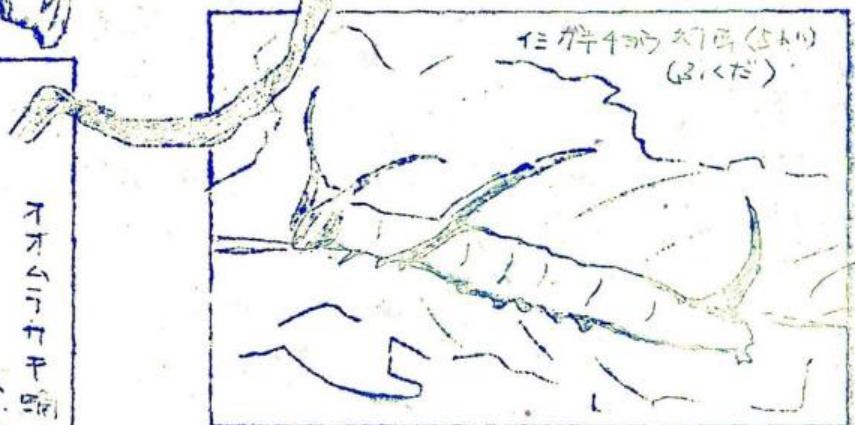
(トニボ^未) コヤマトニボ(?) 大崎町上原 12.V.51. 南端記録。
ミオヤトニボ 安来 14.V.51. ククハクハ

新川鳥

山ジ・スケッチ



第三章 中国の空氣 (34E)



イミガキナコラタケ(ミモリ)
(ミシマダ)

スリレチに於ける集落(16Pより)

ツマグロヒヨウモニ	(上中下)	オイイマベネセセリ	(下)
ヒオドリミヨウ	(上中下)	キマグロセセリ	(下)
ルリタテハ	(下)	ヒヨキマツラマセリ	(下)
キタハ	(下)	(ミシマノ) テヲウチナ	(下)
コミズサ	(下)		
イタモニミヨウ	(下中)		
スミナガシ	(下)		
(ミシミキヨウチナ)			
ミドリミジミ	(下)	ヒアラタミシヨミ	(下)
トテフミジミ	(下)	クニヒアゲ	(下)
ムツカキミジミ	(中下)	キマグランヒナゲ	(下)
ムラモツツバハナ	(下)		
ウラモツツバハナ	(下)		
ベニミジミ	(下)		
ツバメツツバハナ	(下)		
ルリシモツツバハナ	(下)		
ヤコトツツバハナ	(下)		
カリマツツバハナ	(上中下)		
(アリイキヨウチナ)			
イケモニミセセリ	(下)		

方正中行
中行之德
有行無能

アラシヤマヒメミ
白腹鷦鷯 - 3.
千葉県に2.

子島にてシリビアアラシキス.
8月4日、5日、6日
午前8時半、10時半、12時半

会だより

夏の暑さに、本学は3月には様々研究室で活動。先年の3月 さぎは福田君を含む、ヒレコ・ミツコ計画を行つた。太陽風向も又、福田君を中心とした作つた。しかし今学生には人気がない。2年の久木崎君と会長は主として13、副代伊藤和也君 3年生は、一夜自ら名前を書き写したが、かすか熱心ではある。研究室の調査資料もみだりにすき食卓で一ぱいである。サビ音であった、鏡盒の石黒忠久氏の手稿に大川に暫時して「アホさんねんをからびき」がついた。中尾、裕田祐司及び僕の3人で大川に17日3夜。高架の整理で作業などもあり、スイカを3つと用意、バスターと歩んでいたのだ"が"、せんねんだった。日本農業統計に位置して農業関係の研究者が多いのにさう入った。

年会の会場は毎回碧潤先生の如意により新潟市立農業大学に決意された。予定通り、おくれたことなく全く強気で、一年生も熱心で人々が入金されて、それで各所は、既に内儀のものだけまとめていた。近く新潟、千葉、石川、福井、島根へ行く。さつと、面白いものを見つけてくるを以て。(しんかわ)

◆ 全国昆虫研究者、虫友年記 ◆

会の発展と共に、新潟市下の全国研究者と親しく交換、文通することが生まれるに至つた。正月記3月2月3月と、

福田君が年会始まつて以来、始めて交換した福島県のタマキニハダ景雲、三澤良彦先生、二の木ハガキが来た。いわき島の八重正彦君、水戸市には、大野君、云河良治、井上アサ子の新潟、群馬県によると、多摩法華堂同好会の、布セ君はじめ多数の手紙が至り、磐城先生、石川久人、喜屋さん、又、いつもお世話をうつして、リミヤー山口の早川さんなど、名工といえます。東京には、ヤマダラルリツバアの吉井君、足立君は、小倉ちば豊田研之助君から手紙、新潟市には、九太の玉山、色川而五生にも、いづれかが手紙にうつっています。この日よりおそれわれた新潟の山中人園は、珍りつつある。近いに行、赤堀島を経て舟見先生、ラサーレ町田君、荒川在まだ。この手がもれで11月には、大勢あり、これらの人によく連絡をとつて手の届かないところにそろそろもうじきそぞら、見えていきました。

△ △ △ △ △ △ △

後記

約半年を経て発行することができました、予人といつても一番苦心したのは、印刷者の福田君だった。3月、同君の努力に感謝する。後醍醐天皇御廟碑を刊行して完成したのである。夏休み後の大川は、新潟市を走る車を計画して九月と想つてゐる。千葉県の千葉市には、さつと而直川君のオジギをすすめに、又、群馬の寺にこだわらず、飼育の方面を一つ大川にやつていただきたいものである。はじめての編集が、いざいざ、みにくく裏もあるが、おまんじみ22もらいをい。(新川)

志布志高校 生物研究会会報 モンシロチヨウ

No. 3

1951年 8月11日 発行、発行責任者、久不崎重英

編集者、新川勉、印刷者、福田晴夫、采れ美術